

授業記録『ケータイ電話と少年兵』

～高校現代社会：身近にあるものと世界とのつながりを知り、人の生き方を考える～

石川 学

1. はじめに

敬和学園高校社会科（地歴科・公民科）の願いは、「太夫浜から世界へ」である。「敬和で3年間しっかり社会科を学んで、自分と他者を愛し、真実を探求し、日本や世界で平和の実現のために働くことの出来る人間へと育ててほしい」という願いである。

この願いの実現のために、1年生では、「現代社会」を必修としている。環境、エネルギー、政治、憲法、人権、差別、経済、国際社会、戦争と平和、そして南北問題など、現代の私たちの社会が抱えている諸問題について、多くを学ぶ。

2年生では「世界史」を必修とし、「日本史」と「地理」を選択必修としている。歴史的・地理的視点から、幅広く多角的に社会を見る見方を学ぶ。

3年生では特に公民的分野で、自分の興味・関心に応じた内容を意欲的に学ぶことが出来るように大幅に選択科目を増やしている。もちろん、「世界史」「日本史」も2年生から継続して、さらに深く広く通史を学ぶ。

それぞれの授業においては、教科書や資料集を使い、新聞記事や本の抜粋など独自の資料も使う。CDやDVDなど視聴覚教材も用いる。一方的に情報を伝えるだけでなく、生徒の意見を聞いたり、生徒同士の話し合いの機会を設けたりもする。授業の終わりに感想を書いてもらい、生徒の心の中で何が起きているのかを把握する。そうして、生徒の興味や関心を引き出し、問いを持って考え続けることができるような内容とやり方を工夫している。生徒が自分の感性を鋭くし、今日の社会が抱える様々な問題への関心を持ち、自分で考えることができるためにどうしたらいいのかについて、社会科教員6名で共同して追求している。

本校社会科で、特に重視しているのが「現代社会」である。高校に入学して初めて出会う社会科科目である「現代社会」の授業が、生徒にとって興味の持てる、学ぶに値する授業内容になっているか。人の生き方や社会のあり方に関連して、すぐに答えは出ないが考え続けるに値する「問い」に正面から向き合うことの面白さを感じてもらえることができるか。これらが生徒の3年間の社会科への取り組みに大きく影響する。

実際の授業の場で、「社会が苦手」とか「おもしろくない」「覚えられないから嫌い」とか、さまざまなマイナス表現をする生徒たちも少なくない。1年生の「現代社会」の授業

では、そういう苦手意識・抵抗感を少しでも取り除きたい。そのためには、生徒にとって出来るだけ身近な事物や内容を取り上げ、生徒の関心を引き付けたい。自分に関係することと感じたり、それはいったいなぜだろうと考えたり出来る授業を展開したい。

そんな願いのもと、2010年度から「ケータイ電話と少年兵」⁽¹⁾を取り上げてみた。

今日において、多くの高校生にとって「ケータイ電話」は必需品である。中学時代から持っている生徒も多い。⁽²⁾ 生徒の興味・関心を引きつけやすい題材である。しかし、「少年兵」については、生徒たちは全くと言っていいほど知らない状態で、簡単に聞き流すことのできない深刻な内容を聞かされることになるので、知った時の衝撃はかなり大きいようだった。

「こんなことが実際にあるなんて本当に驚きです。話を聞いているだけでも辛いのに、実際にこれを行っている子どもたちはどんなに辛いだろうと、想像もつきません。アフリカのどっかなんて私たちと全く関係がないだろうと思っていたけど、身近なケータイがあんな悲惨なこととつながっていたなんてすごくショックです。」(2011 名前なし)

『ブラッド・ダイヤモンド』の中にもあった、村を襲って少年をさらっていくシーンはとても強烈で、ショッキングだった。あんな様なことが、映画の中だけではなく、現実で起こっていると考えていると、『自分たちは何でこんなに、のほほんと暮らしているのだろうか』と、恥ずかしくなった。」(2011 K.G.)

生徒たちの内側には「考えたい」「本当のことを知りたい」「自分にできることをしたい」という想いが眠っている。その想いに応えるような授業を作り出してみたい。本稿はその一つの試みの報告である。

2. 授業のねらい

この授業では「自分たちが生きているこの世界で、どんなことが起きているのか。誰が傷ついているのか。戦場に狩り出される少年・少女と自分たちはどのようなかかわりがあるのか。」について、確かな情報を得た上で「自分たちに何ができるか」を考えさせたい。

そして、この授業の後には、過去の戦争を通して、人の生き方・社会の在り方について考える平和学習を組んでいる。かつてはこの日本でも、多くの若者が戦争で死ぬことを求められた。特攻隊や人間魚雷、鉄血勤皇隊など今の日本ではとても考えにくい形で、若者が死ぬことを求められた近い過去がある。にもかかわらず、生徒たちはそういう事実を知らない。知らされていない。したがって、戦争や紛争に関心がない。

だから、今では平和な日本であるが、「少年兵」とは違うけれども、過去になぜ戦争で若い命が無残に失われることになったのか、いったい何が起こったのか、日本はどんな悲しみを乗り越えてきたのか、自分の目と耳と心を総動員して、知って感じて考えてほしい

と願っている。「ケータイ電話と少年兵」は、こうした問題を追求していくことができるようになるための準備としての授業でもある。

ただ、この種の「戦争と平和」の問題を扱う時、「戦争反対」が正解になってしまうと授業は深まらない。今回の授業は、生徒に多くの知識を得させる授業、一つの答えを用意している授業ではない。「授業の内容に対して、どんな考えや感想を持ってもいい。それを（授業者とクラス全体が）受け止める。その言わんとするところを聴き取る。自分の意見と真逆の意見から学ぶこともとても大事である。」という姿勢が徹底していないと、生徒の自由な発想、豊かな感性が働くことはない。だから、授業では生徒の心の中に生じた思いをくみ取るために、何度も感想を書いてもらう。その都度、生徒たちの声に学ぶところは大きい。

さらに、キリスト教をすべての教育活動の根幹に置く本校では、社会科の授業でこそ、社会の中で「痛みを覚える人々」と共にありたいと願っている。なぜ人々が痛んでいるのか。どのように痛んでいるのか。どのような社会の仕組みがそこにあるのか。その痛みを和らげて行くためにはどうしたらよいのか。そのような問題意識を持ち続けてほしい。

社会は無機的な、単なる人の集まりではない。人々は何らかの形で関わり合い影響し合って社会を作っている。その中には傷ついたり、痛んだりしている人々がいる。悲しんでいる人々がいる。逆に、他者を傷つけ、痛みや悲しみを与える人々もいる。そこに「仕組み（＝構造）」がある。その社会の仕組みを理解し、誰がどのように傷ついているのかをしっかりと把握していきたい。人々が傷ついているその原因を探ると同時に、その問題の解決のために、自分たちには何が出来るのかを考え合いたい。社会とは、私たちの手によって解決されるべき多くの問題を抱えている有機的なものである。

したがって、「現代社会」の授業において、過去と現在の問題を提示して、地理的・歴史的な視点を含んで多角的に考えることのできる教材を作っていく必要がある。その意味で、「ケータイ電話と少年兵」は、問題に対する生徒の自由な見方・考え方・感じ方を保障しながら、人が人らしく、互いに大事にしあい、共同して生きていくことが出来るためにはどうしたらよいのかを考えられる教材であると考えられる。

新高等学校学習指導要領⁽³⁾には、『現代社会』の「目標」は、「人間の尊重と科学的な探究の精神に基づいて、広い視野に立って、現代の社会と人間についての理解を深めさせ、現代社会の基本的な問題について主体的に考察し公正に判断するとともに自ら人間としての在り方生き方について考察する力の基礎を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる。」と記されている。

こうした目標を考えた時、生徒にとってとても身近な「ケータイ電話」の部品が、内戦によって多くの人命が失われ、なおかつ、自分たちと同じ年頃の少年・少女たちが巻き込

まれている国や地域から輸入されたものであることを知ること。さらに、特攻作戦に志願させられ、米艦船に突撃して行った隊員の遺書などを通して戦争の悲惨さを知ること。それらのことを、国を守ることや命の尊さなどに関連付けて学ぶことは、指導要領が示す「内容」の「(2) 現代社会と人間としての在り方生き方」に言う「現代社会について、倫理、社会、文化、政治、法、経済、国際社会など多様な角度から理解させるとともに、自己とのかかわりに着目して、現代社会に生きる人間としての在り方生き方について考察させる。」ことになると考える。

3. 授業計画 (①～⑩は各授業時間の主な内容を示す)

第一時 ケータイクイズと答え合わせ

- ①クイズでケータイを認知する。
- ②ケータイの部品に目を向ける

第二時 タンタルと少年兵～コンゴ内戦時の子どもたちの状況～

- ③部品に使われているタンタルが身近であることを知る。
- ④そのタンタルが内戦に関わっている。
- ⑤資料を読んで、内戦で少年兵が使われている様子を知る

第三時 DVD『ブラッド・ダイヤモンド』(抜粋)

- ⑥少年兵の実態を映像で確認する。

第四時 感想の紹介と話し合い

- ⑦感じたことを文章にし、クラスで共有する。

第五時 話し合いとNGOの紹介

- ⑧問題解決のために何ができるかを考える。
- ⑨すでに行動している団体を紹介し、できることの一例を提示
- ⑩次の学習内容の紹介

このような授業の流れの中で、2010年度、2011年度は、コンゴ民主共和国の政治状況、児童労働の状況について触れていた。さらに、携帯電話の生産工場としてのアジアにおける児童労働⁽⁴⁾、子どもの人身売買⁽⁵⁾をも南北問題とのかかわりの中で説明に加えていた。2012年はそれらすべてを割愛して授業を行った。

また、今回2013年度は児童労働を割愛して、ケータイと少年兵の問題に集中して、その後の特攻隊の授業を組んだ。

4. 授業の実際

<第一時> まず、授業のはじめに次のように問う。

授業者「君たちの日常の生活の中で、絶対に欠かせないGoodsは何だ？ なくてはならない物は何だ？ もしそれがなかったら、君たちがとても困るものとは何だ？」

生徒「洗濯機」「i Pod」「ふとん」「筆記用具」「時計」「電子機器」「タブレット」「ケータイ」「パソコンとか」「服」「ヘアゴムとかピンとか」「お金」「仲間」

授業者「いろいろあるよね。全部そうだよね。なくちゃ困るよね、って思うけど、今回は『ケータイ』と『スマホ』に注目します。これがないとけっこう困らない？」

授業者「ところで、ケータイやスマホって、みんなは何に使っているの？ その機能を10種類以上挙げられるかな。ちょっと自分のノートに書いてみて。」

生徒「電話をかける」(友だちや、隣の席の生徒と話をしながら書いている。机間巡視しながら個々に声をかけていく。)

授業者「はい、それでは、一人一個言ってみて。」

生徒「電話をかける」「メールとか」「音楽プレーヤーとゲーム」「SNS」「テレビ」「カメラ」「マップ」「LINE」「GPSナビ」「検索機能」「アラーム」「懐中電灯」

授業者「ほんとにいろいろあるね。そこで、こんなにお世話になっているケータイ・スマホについて、君たちがどれだけ知っているか、ちょっとだけ、クイズをやらせてもらいます。では、ケータイクイズをどうぞ。」(プリントを配布)

～ これで君もケータイ博士？ ～

問1 最初にケータイが登場した国は、次のうちどこでしょうか。

- ①日本 ②イギリス ③アメリカ ④スウェーデン

問2 2012年度、ケータイ・スマホの加入契約数の最も大きい国はどこですか。

- ①中国 ②アメリカ ③インド ④日本 ⑤ブラジル

問3 現在、日本のケータイ・スマホの加入契約数はどのくらいでしょうか。

- ①9400万台 ②1億台 ③1億2000万台 ④1億4000万台

問4 現在販売されているケータイ・スマホのうち、最も軽いものはどのくらいでしょうか。

_____ g

問5 日本で最初に作られたケータイの重さはどのくらいだったでしょうか。

_____ g

問6 ケータイ・スマホ1台に使われている電子部品の数はいくつですか？

- ①400個 ②500個 ③600個 ④700個

問7 2012年度に販売されたケータイ・スマホは何台でしょうか。

- ①2900万台 ②3500万台 ③3900万台 ④4200万台

問8 現在、買い替えによって「解約された古いケータイ・スマホ」は専門業者によって、何%程度回収されているでしょうか。

- ①80% ②60% ③40% ④20%

問9 (回収された)携帯電話1トンから取れる“金(Gold)”の量は?

- ①8g ②80g ③180g ④280g 参考)日本の金山は鉱石1トン当たり50g

→ 回収されたケータイは _____ 鉱山と呼ばれている

問10 ケータイ・スマホに使われている部品の中の鉱物資源(希少金属:レアメタル)で、地球上で日本から最も遠い国から運ばれて来ている物質(金以外)は?その国はどこ?

物質(資源)名 _____ 国名 _____ (6)

だいたい10分ぐらいで答えを書いてもらい、その後にクイズの答えを解説していく。
その答えと解説は以下のようである。

問1の答え ③アメリカ

【解説】アメリカでは、日本との戦争に勝った翌年1946年に登場。自動車電話という形で家の外に持ち出すことが可能だった。日本では1979年に登場。アメリカに遅れること約30年。

問2の答え ①中国

【解説】何といっても世界最大の人口13億人を誇る中国が世界最大の加入者数を誇る。が、意外と生徒はアメリカとか日本を選ぶ。それだけ視野が狭いということかもしれない。⁽⁷⁾

問3の答え ④1億4000万台

【解説】この数は実は想像を含むオーバーな数字。2013年度は、あえて大きな数字を上げてみた。しかし、生徒たちの多くは、現在、日本の人口を超える契約者数に至っているとは思いつかないようだ。総務省によれば、携帯電話及びPHSの加入契約者数は2011年12月末時点の合計で、1億2986.6万人。日本の人口を超えている。会社で契約したり、一人2台持ったりするケースが少なくない。

問4の答え 100 g

【解説】生徒に古い機種 of ケータイ(105g)を回し、その軽さを体感してもらおう。ヒントとしては、「鶏肉128円ぐらいの重さだけ…」と言ってみた。しかし、普段、スーパーなどでパックに入った鶏肉などを自分で買った経験のない生徒も多く、何かを手を持った時の重さの感覚はほとんど期待できない。

問5の答え 3,000 g

【解説】2013年度は教室に鉄アレイ(3kg)を持ち込み、それを生徒に渡して、その重さと「軽量化」のすごさを体感してもらった。2012年度までは、生徒の中ではこの3,000gという数字が単なる数字

で終わってしまっているように感じていたからである。ここでは、携帯電話の軽量化の技術革新がいかにすばらしいものであるかを強調する。この軽量化が、携帯電話の爆発的な普及に大きな影響を与えたことも指摘する。そして、この軽量化をもたらした要因の一つとして、あるレアメタル（つまり、タンタル）があることを授業中で具体的に取り上げる。

問6の答え ④700個

【解説】（この問いは生徒にはピンと来ないようだが）ケータイやスマホが、現代の先端技術が集約されている製品で、実にたくさんの、そして非常に微細な電子部品によって成り立っていることを、携帯電話の内部の「プリント基板」の拡大図（手書き）を黒板に貼って確認する。その中で集積回路、コンデンサー、バッテリーなどを指摘する。

問7の答え ④4200万台

【解説】「不要」とされているのは、実際には買い換えられている数のことを示している。この数字自体にあまり大きな意味はないが、次の問8の答えと関連させると、レアメタルの有効利用に思い至らない日本の実態が明らかになる。

問8の答え ④20%

【解説】ほとんどの生徒はこの問いに正解できない。彼らの感覚としては、「リサイクル」は当たり前であって、なぜこんなに低いのかという疑問も生じるようだ。ただ、家族の中で、新しい機種に買い替えたのに古い機種のケータイをそのまま大事に持っているケースもあることには容易に気づく。

問9の答え ④280g → 都市 鉱山と呼ばれている

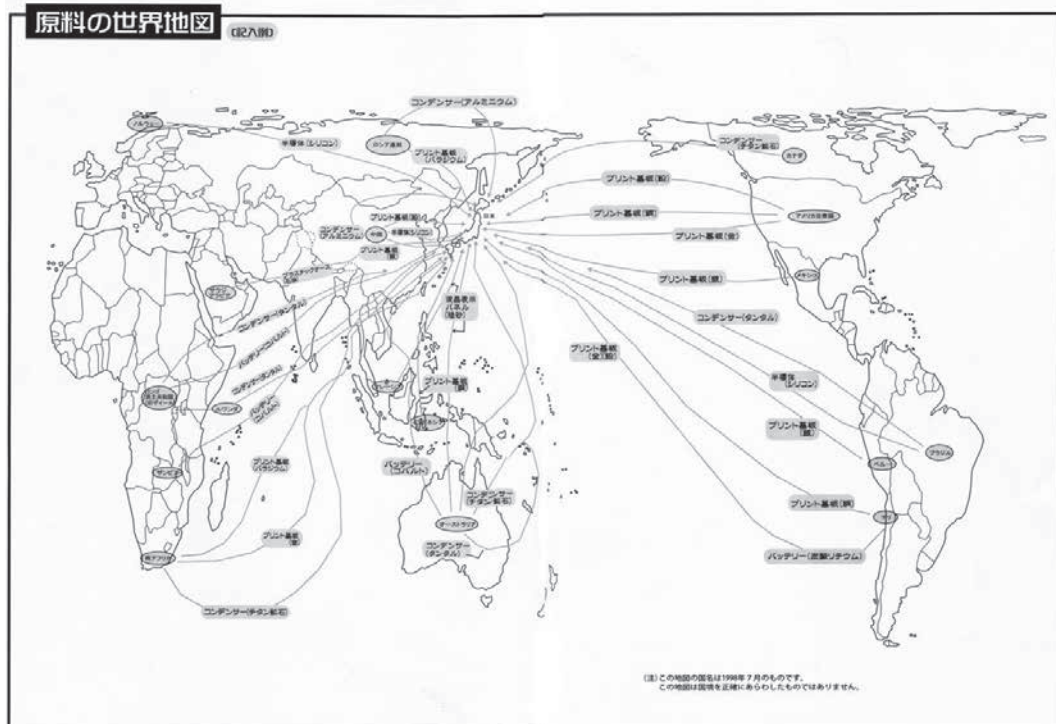
【解説】生徒にとっては実感のない数字のようだ。だが、レアメタルなどの地下資源に乏しい日本としては、この都市鉱山を生かすことを真剣に考える必要があることを指摘する。ちなみに、280gの金は、2013年9月3日時点での国際価格で1,279,600円。この数字に驚く生徒は多い。この数字をもとに単純計算して、4200万台の携帯電話がすべて回収されてその中から金を取り出されたとすると、その金の総額は53億7432万円に及ぶ。2013年度は「回収するための費用と、回収した金の価格とどちらが高いのか」という質問があった。

問10の答え (例1)	物質 (資源) 名	金	国名	南アフリカ共和国
(例2)		タンタル		コンゴ民主共和国

【解説】ほとんどの生徒は、石油や石炭などは知っている。金がロシアや南アフリカで産出されていることを知っている生徒も少なくない。しかし、レアメタル（希少金属）については知らない。携帯電話には様々な電子部品が使われているが、その電子部品の素（もと）となっている鉱物資源の多くが海外からの輸入であることをしっかり提示しておきたいので、次の時間の冒頭に世界地図で確認する。

<第二時>

資源の流れが分かる世界地図⁽⁸⁾を一人一人に配布し、黒板の前には世界地図を掛ける。



この世界地図を見ながら、一通りどんな国から、どんな資源を買っているかということを確認する。その後で特に、コンゴ民主共和国、そしてタンタルに注目させ、以下の点を板書して説明する。

- ・ケータイとスマホの普及は、コンデンサーの小型化・軽量化によって可能となった。
(コンデンサーとはケータイの電気の流れを調節する装置である)
- ・コンデンサーの小型化・軽量化を可能にしたのはタンタル。(もちろん、タンタル以外にも多くの部品、多くの資源が必要であるが……)
- ・しかし、タンタルは日本では採れない。すべて輸入である。
- ・タンタルの主な産出国はコンゴ民主共和国である。
(タンタルは世界中のケータイに使われていて、2000年には270億個タンタルコンデンサーが使われた。)⁽⁹⁾

そして、以下のように、コンゴの状況を説明する。次は2011年の授業の様子である。
授業者「このクラスの中でアフリカに行ったことがある人は？」

生徒「……」

授業者「まあ、なかなかいないよね。アフリカ大陸はちょっと遠すぎかな?」

生徒「先生は?」

授業者「ケニアとタンザニアなら行ったことがあるけど、コンゴはない。一度入ってみたいと思うけど、君たちはどう?」

生徒a「行きたいとは思わない。だって遠いじゃん。イタリアとかだったらいいけど…」

生徒b「行ってみた〜い。キリンさんとかと会えるんでしょ?」

生徒c「日本から出たくない。海外ってなんか危ない感じじゃん。」

授業者「なるほど。でも、海外って危ないってばかり思ってたなら、なんか人生楽しくない!? いろいろ冒険してみてもいいんじゃない!?」

生徒d「別に冒険したくないし…。治安悪そうだし…。」

授業者「そうかあ〜。でも、これからの話は、ぼくらが使っているケータイとコンゴが実はつながっているっていう話なんだけど。ちょっと聞いてください。」

授業者「このタンタル、実はこのタンタルに関わって、多くの人の血が流れてるわけ。なぜかって言うと、コンゴでは昔、特に1998年から2002年まで、政府軍と反政府軍とに分かれて戦い合っていて、その内戦で人口5,000万人のうち300万人が犠牲となって死んでいます。⁽¹⁰⁾300万人って、みんな少ないと思う?」

授業者「で、とりあえずいったんは収まったその戦争だけど、周りの国とかもかかわって、それらの国の武装勢力ともかかわって、まだまだ戦争状態にある地域があるわけ。その戦争の中で、反政府軍の、いわゆる武装勢力っていう、ライフルとかマシンガンなどの武器を持って戦っている人たちが、自分たちの武器を買うお金、つまり資金源として、タンタルを掘って、それを外国に売っているわけよ。」

授業者「そしてね、そのタンタルがかかわる内戦、つまり戦闘の中で、みんなと同じくらいの子どもたち、って言うかそれ以上に若い、幼い、小学校の低学年の子達が、実はマシンガンをぶっ放して戦っています。そういう子どもたちの兵隊のことを、少年兵って言います。女の子は銃を撃つっていうことはないけど、大人の兵隊によって暴行されたり、家事、例えばご飯作らされたり洗濯させたりする。まあ、とにかくひどい目に合わされる。司令官の子どもを妊娠したりすることもある。逃げ出さないように手首・足首を切られることもある。」

授業者「で、最もしんどいのは、少年兵たちがホントにしんどいのは、自分の親を殺せて言われることがあることなの。」

生徒e「えっ? なんで?」

授業者「それはね、こういうケース。例えば、反政府勢力の兵隊が村を襲撃したりした時

に、大人は殺して、子どもは生け捕りにして連れて行く。自分たちの基地に連れて行って訓練をする。銃の撃ち方とかを教えて、次にどこかを襲撃する時に使う。本当に使える兵隊になったかどうか見分けるために、その子の故郷の村にもう一度襲撃をかけて、『自分の親を殺してこい。』って言われることがある。『そんなの出来ません！』って言いたいけど、言ったら自分が殺されるから黙っていると、『殺せなかったら手首切ってこい』と言われる。『もしお前が、自分の親の手首切れなかったら、この村、俺たちが皆殺しにするからな。』そんなふうに脅しをかけられる。究極の選択だよな。もし、みんな、自分がこんなこと言われたどうする？」

生徒 b 「考えられない。っていうか、考えたくない。」

授業者 「でも、親を殺したり出来ないし、自分が殺されたり村の人みんなが殺されるよりはましだし、っていう理由から、自分の親の手首を切り落とすことになる。」

生徒 f 「ありえない……」

授業者 「そこまでいってしまうと、もう頭がおかしくなるっていうか、心が壊れるわけよ。後はもう怖いものなしで、どんどん人殺しをするようになる。でも、あまりにもつらい経験をさせられるから、マリファナなどの薬物に手を出して、頭をボーっとさせないとやっていけなくなっていて、気が付いたら薬物中毒になっている子どももいる。」

授業者 「で、これから、資料を配るから、もうちょっと、少年兵の実態を見てみようか。」

授業者 「ぼくらは、っていうかみんなは、たまたま日本に生まれただけなんだよね。アフリカがいやだ。コンゴがいやだ。とか言って日本に生まれたわけではないよね。彼らも別にコンゴとかに生まれたかったわけではないよね。でも結果として、日本に生まれたみんなと、コンゴに生まれた子どもたちとでは、たまたま生まれ落ちた場所が違うっていうだけで、ずいぶん違う人生になってしまう。」

授業者 「じゃあ、次にこの資料読んでみるね。」(少年兵についての資料を配布)

【ケース1】トーマス(16歳)は、13歳のとき、学校に行く途中でRCD-Gomaに勧誘され、8歳の弟と友だち数人で、入隊することにしました。彼は北キブ州の訓練所に送られ、そこで5ヶ月間を過ごします。トーマスはその訓練所で背中を殴られ、背骨に重症を負った結果、両足が動かない体になってしまいました。「毎日の訓練をおとなのようにうまくこなせなかったり、見張り中に居眠りをしてしまったときに、訓練所の指揮官はライフルの台尻でぼくを40回も殴りました。背中は無数の傷はそのときにできたものです。入隊したばかりのころはむずかしい訓練をうまくできなかったので、毎朝殴られました。2人の仲間は体罰を受けて死亡し、ほかの子ども兵士がトイレに埋められました。ぼくは今も彼らのことが忘れられません。」⁽¹¹⁾

【ケース2】オリバーは、11才のときに子ども兵士になり、それから7年間、さまざまな武装集団に所属してきました。コルタンが豊富にとれるカトヤという町を略奪した後、RCD-Gomaの司令官は一般市民を襲撃するよう、オリバーたちに命じました。「わたしたちは、村人のすべてのものを奪うように命令されました。彼らを追い出して、住まいを破壊するつもりだったのです。少しでも抵抗した村人は全員殺すようにとも命じました。司令官は、わたしがその命令を実行するかどうかたしかめるために、兵士2人にわたしを見張らせていました。命令にしたがわなかったらわたしを殺すつもりだったのです。だから、わたしは村人を銃で撃ち殺しました。つぎに女性と子どもが連れてこられて、わたしに、生き埋めにしろといました。女性と子どもは泣き叫んでいて、逃がしてほしいと訴えていました。かわいそうでしかたありませんでした。でも、後をふり返ると、わたしを見張っていた2人の兵士が目に入ったのです。わたしは自分にこう言い聞かせました。『この女性と子どもを逃がせば、後ろの2人が自分を殺すだろう。』自分が助かるために、わたしは女性と子どもを生き埋めにしました。⁽¹²⁾

授業では常に、人の死を数として見ずに、一人の血肉のある人間の死として感じてもらいたいと願っている。そのために、リアルなケースを紹介した。

<第三時>

授業者「これからブラッド・ピッド主演の『ブラッド・ダイヤモンド』⁽¹³⁾という映画を見てもらいます。授業で扱ったのは、コンゴ民主共和国という国のタンタルという物質だけど、『ブラッド・ダイヤモンド』という映画ではダイヤモンドを扱っています。シエラレオネというアフリカの西の方にある国で起ったことです。この映画の中に、みんなよりももっと若い、幼い子どもたちが出てきます。その子どもたちが少年兵として訓練されて、実際の戦闘の場面で使われるシーンが出てきます。タンタルとダイヤモンドとでは、資源の種類や国とかが違うけど、少年兵の実態に関してはほとんど同じです。資源をめぐるって国の内外でいろんな動きがあって、戦争つまり内戦がおこっています。その戦いで使う武器の購入資金として、鉱物資源を売るというパターンは一緒です。なお、この映画では少年兵たちが人を銃で撃って殺すなどの、かなりきつい場面が出てきます。人が殺される場面がそのまま出てくるので、こんな場面は見たくない人は目を伏せててもかまいません。この映画、長いので全部見てもらうことはできませんが、部分的に三つの場面を見てもらいます。」

以上のような説明を加えた上で、映画を部分的に30分程度鑑賞する。

生徒に見てもらうのは次の三つの場面に限定。⁽¹⁴⁾

- (1) 映画の冒頭で、平和な村が反政府勢力（武装ゲリラ）によって襲撃され、男・女、大人・子ども、若者・老人等、全く見境なく殺される。そして、多くの子どもが連

れ去られる。

(2) 村から連れ去られた子どもたちが、少年兵として戦場で使えるようになるために訓練させられる。幼い子供がマシンガン撃たされて、人が死ぬ。

(3) 映画の中盤で、反政府勢力が町に迫って、そこで政府軍兵士と激しい銃撃戦を行う。そこで銃を乱射している兵士たちの中に、小学生くらいの少年兵がいることを指摘する。その場面で停止ボタンを押して確認する。

授業者「まあ、こんな感じです。それでは残りの時間で、今日見た映画の感想と、今までの授業について感想を書いてください。

<第四時>

授業者「授業を聞いて、『ブラッド・ダイヤモンド』を見て、感想を書いてもらいましたが、その感想を紹介します。」

「自分と同じくらいの年の子どもたちが、銃をもって人を殺したりするなんて、想像もつきませんでした。誘拐されて、軍隊に入った子どもたちや、人を殺した子どもたちは、精神的にやばいと思うのに、体罰をしたり、親を殺したり、ありえないなあと思いました。コンゴではそう一ゆうことが当たり前のようになっているのかなと思いました」

(2013YK)

「私は日本に生まれてきたから、少年兵たちみたいにはならなかったけど、自分の弟たちを見ていて、あんなに小さい子どもたちに虐待をしてまで、戦争はするものではないと思いました。どうして戦争というものがはじまるのか、もっとくわしく知りたくなりました。子どもを使って戦争するのはまちがっていると思いました。」(2013年HR)

数人の感想を紹介した後であらためて、どう感じたかを聞いてみた。そうすると、以下のような答えが返ってきた。一つ一つ板書をしながらすすめていった。

【板書の内容】

- ・こんなにヒドイとは思わなかった。
- ・コンゴの子どもたちがかわいそすぎる。
- ・とても小さい子どもたちが人殺しをさせられている。
- ・世の中はひどいことになっている。
- ・世の中は残酷。その残酷さを知らないまま、知らされないまま…さらに残酷。
- ・日本に生まれてよかった（私たちはとても恵まれている）。
- ・コンゴに生まれなくてよかった。

授業者「みんな、とても真剣にこの問題を考えてくれてありがとう。ただ、3年前に今回みんなにしたのと同じような内容の授業をしたら、そのクラスの半分以上の人が、『自分たちには何もできない。こういうこと知ったところで仕方がない。』っていう感想でした。そこで、このクラスのみんなだったら、どんなふうにか考えるか、もう少しみんなで話し合っただけで考えを深めてみたいので、次に紹介する意見について、考えてみてくれないかな。そして、コメントしてくれないかな。」⁽¹⁵⁾

『先生、こんな授業してなんになるの？ ケータイの原料がどこから来ている、日本に住んでいる自分にはどうしようもない。世界の国々で起こっている問題について、いろいろ知ったとしても、自分には何もできないし、何かしたところで何も変わらないから仕方がない。』

2011年度、2012年度は、2010年度に生徒から出された問いをそのまま板書し、こちらからは何も言わずに「自分の意見、書いてみて」と指示をした。次の時間にその意見のいくつかを紹介するところから授業を始めた。

2013年度は、その場で、この意見についてどう思うか聞いて、数人にコメントを出してもらい、板書をして紹介をしたうえで、あらためて時間をかけて感想を書いてもらった。すぐに出たコメントは以下のような内容であった。

- ・知っていても損はない（知らないよりはマシ）。
- ・難民の生活（食料、テント）を支援するために、資金を提供することに協力する。
- ・今は何もできないかも…だけど、将来、紛争地域の人々を支援する団体に入るかも…だから知ることは大事。
- ・何もしなくても、知ることは大事。知ることによって戦争は他人事ではないことを知ることが大事。知っていれば、必ず何かにつながるかも。
- ・コンゴだけではなく、紛争地域はいろいろある。世界のことを知っていれば、できることはある。

<第五時>

授業者「前回の授業の後でみんなに書いてもらった感想を始めに紹介します。」

「確かに助けられるわけでもないし、自分たちでどうこうできる問題じゃない。ケド、今、世界で、どういうことが起きているのか知るだけでもいいんじゃないかな。当たり前前のことに感謝できたり、物を大切に使いたり、覚え方や言葉使いとかも変わったりすることもあるんじゃないかな？」(2013年OH)

他にもいくつか紹介した上で、今度は「自分たち（日本の若者）に何が出来るか？」に

ついて考え合って意見を出してもらい、その内容を板書していった。

- ・お金や物資の寄付
- ・現地に行ってユニセフなどの活動に参加し支援する
- ・ジャーナリストやカメラマンになる → 状況を世界に発信する
- ・戦争の地で核が使われそうな時、日本が唯一の被爆国だから「使うな」と訴える
- ・募金する → 現地に人もお金も送る
- ・署名によって日本や世界を動かす → 国連などの国際機関に訴える
- ・ペットボトルのキャップを集める → お金にかえて送る
- ・スマホやケータイのリサイクルをすすめる → 金属を回収して再利用する
- ・ベルマーク運動やインクカートリッジの回収、あるいは直接寄付をする

こうして生徒の考えを引き出し、全体で共有した上で、以下のような説明を加えた。

授業者「ここで、みんなにちょっと紹介したい取り組みが二つあります。すでに、世界は動いています。いろんな取り組みがあります。自分が何かしたって何も変わらないって言う考えが本当に正しいのかどうか、考えてみてください。このクラスのはほとんどは、そんな考えはないようですが、参考にしてみてください。」

授業者「『ブラッド・ダイヤモンド』という映画にも出てきていたのですが、実は今、世界ではダイヤモンドの取引に関して、紛争地域から売りに出される鉱物資源、武器購入資金を手に入れるために販売される資源、例えばダイヤモンドなどは取り扱わないようにしようという取り決めがあるのです。ヨーロッパの人々が不買運動を起こしているのです。血塗られたダイヤは買いたくない。人が殺されたりすることにかかわるダイヤはイヤだ、という声が上がって、世界の国や企業がそういう資源を売り買いするのをやめようと動いているのです。ただ、抜け道がいろいろあってうまく行っていない部分も多いのですが、建前としてははっきり、内戦とか武器購入とかについて、NOを出しています。」

授業者「あと、コンゴなどでは内戦が終わっても悲劇が続いていて、かつて戦場になった地域の人々特に子どもたち、少年兵や少女たちの心の傷の深さが計り知れないのです。人を信じることができないだけでなく自分を信じることさえできない。そういう彼らを支援団体が建てた施設に収容して、心と体のケアや職業訓練をしているのです。心の傷、トラウマはカンタンに癒せるものではなくて、時間をかけてカウンセリングしたりしています。現地の人々がカウンセラーとしてその役割を担っているのですが、お金がかかります。それに必要な資金を日本から援助している団体もあります。お金を送るだけではなく実際に日本の若者が現地に行っ

て、村の人たちと関係を作って支援をしています。この団体の代表の鬼丸さんという人は、数年前敬和に来て話をしてくれました。テラ・ルネッサンス⁽¹⁶⁾という団体です。」

ここで、教室に持ち込んだパソコンをプロジェクターに接続をして、国際NGOの一つ、テラ・ルネッサンスを紹介。テラ・ルネッサンスのHPにアクセスして、その活動の一部を紹介。

15分ほどかけて、子供たちの状況、支援活動の目的や内容、その結果どんな変化がおきているのか、簡単に紹介する。かかわっている日本の若者の言葉も紹介する。

授業者「どうだった？君らでもけっこうやれることたくさんありそうじゃなかった？こういう問題にかかわって活動している人けっこういるんだよね。世界にも日本にもね。」

授業者「これで、ケータイと少年兵の授業は終わります。全体の感想を書いてみてください。その前に、次の授業の予告をちょっとします。」

授業者「コンゴでは、小学生の年代の子どもたちまでもが武器を持って戦わされていたけど、どうしてもよその国の話だと思いたい部分があるかもしれないね。けど、似たようなことは、実はかつての日本でもあったという話をします。その一つの例は、太平洋戦争末期の特攻隊です。飛行機に250kgの爆弾を積んで、敵の船めがけて「突っ込めー」と言われ、実際に飛行機ごと突っ込んで行って、死んでいった若者たちがいたんです。もう一つの例は、爆弾抱えて敵の戦車の下にもぐりこんで、戦車が自分の体の上に来たときに、自分の体ごと爆発させろと言われ、手榴弾を渡され、実際にそれで爆発して、死んで行った子どもたち、今で言う『自爆』攻撃をさせられた子どもたちが沖縄にいたんです。」

授業者「そういう子どもたちや若者たちがいったいどんな思いで自分の死を迎えていったと思います？また、何でそんなことになってしまったのかって思いませんか？これらについて、次から、じっくり学んでみたいと思います。」

こうして5時間扱いの授業が終わった後で、最後の感想を書いてもらった。生徒たちは自分なりに一生懸命考えて、自分の想いを文字にしてくれた。

「いつも使ってるものが、どこで作られたものとか知るの大事なことだと思いました。ヨーロッパの人たちがしたように、一人ですると小さなことだけど沢山の人が集まってくれば、一つ一つの支援などが大きくなると思います。／なので、積極的にそういうボ

ランティアや活動に参加し、募金や物資の寄付にも協力していきたいです。今、ウチらは普通にこういう生活を続けてくると、小さな子どもたちが何の関係もない一般の人たちを巻き込んで、戦争や紛争がばかばかしく思えてきます。何で戦争するんだろー？とか、もーなんか「なんで？」「なんで？」がいっぱいです。／巻き込まれた人たちには、早く幸せになってもらいたいです。完全に幸せになるのは無理な人もいるかもしれないけど、少しでも、楽しんで笑顔を見せられるようになってほしいです。」(2013 OH)

「今、自分の身の周りにある物は、自分は何も考えずに使っているけど、そのためにたくさん命が失われていることを忘れてはいけないなと思いました。／もし自分も同じ状況で『親を殺せ』と命令され、自分の親を殺さないといけないことになったら一生かかっても消えない傷になるなと思いました。／自分には何ができるんだろうと考えて、できることがあるならば、やろうと思いました。(募金とか…。)／あと、自分がこうして生活できていることに、感謝しないといけないなとあらためて思いました。」(2013 SK)

5. 授業の評価

2010年から毎年この5時間の授業を行ってきた。「いったいどんな授業を生徒としたいのか。生徒たちに何を考えてほしいのか。どう成長してほしいと願っているのか。」この問いに向き合って教材研究を行ってきた。その上で、授業の中で出てきた生徒たちの声に耳を傾けてきた。この「ケータイ電話と少年兵」の授業の中で「教師の教えたものが子どもの追及したいものに転化して」⁽¹⁷⁾いるか。学びたがっている生徒の心の中で学ぶという「事件」⁽¹⁸⁾が起きているか。確信はない。しかし、社会に対する見方・考え方の変化は確実に起きていると思われる。生徒たちの少年兵に対する関心は決して低くはない。考えるに値する大きな問いと出会っていることは確かである。彼らの頭と心は大きく動いたようである。

「この地球に生を受けながら、生まれ育った国や地域、そして時代が違うというだけで、こんなにも違う生き方を迫られる少年・少女がいるということを知る。」このことは思春期真っただ中にある生徒たちにとって、とても意味のあることだと思う。感想を読むと多くの生徒の心の中に、自らを客観視するようなものの見方が生じている。

その変化が、生徒たちが自分や他者の存在を受け入れ、お互いがお互いを大事にして、豊かに関係し合う中で、痛みを覚えている誰かに寄り添って生きることにつながることを願うばかりである。

生徒たちはみな、人として豊かに生きたいと願っている。だからこそ、何が正しくて何がまちがったことなのか、人はなぜ生きるのか、誰もが幸せになりたいと願いながらなぜ

殺し合うのか、幼い少年少女を巻き込んだ戦いがなぜ止められないのか、それらの意味について深く考え、真実を学びたいと願っている。

「少年兵や特攻隊は、どっちも若い人がかかわっていて、想像しただけで、すごく別世界みたいで怖かった。特攻隊では、日本軍は人の命をどんなふうと考えていたんだろう？と疑問に思った。いくら国のため、天皇のためであっても、今考えたらすごくおかしいと思った。」(2013 YK)

このような「考えるに値する問い」と出会いたい、人としての自分の生き方と社会の在り方について深く学びたいと願う生徒に応える授業を展開していきたいものである。

6. 最後に

2012年度に、この授業の後で、一人の生徒が寄ってきて「先生、日本人ってホントに別な意味でガラケーになっちゃうかもね…」とぼそつと言って、去っていった。

今後、世界ではますますケータイが売れ続けていく。2011年の世界の携帯電話の販売台数は1億7500万台に及ぶ。⁽¹⁹⁾ 日本でも今後「6000万人のガラケーユーザーのスマホ選び」⁽²⁰⁾が加速すると思われる。しかし、先の生徒の発言は、世界中から集まる資源が私たちの生活を豊かにしてくれる中で、商品の開発・販売・消費ばかりに目が向き、そこで使用される資源とその背景などについて、微塵も想像力を働かせようとしない私たち大人の「精神のガラパゴス化」を憂いての発言だと思われる。

過去の出来事について語る言葉を持たず、今の世界のあり様に目を閉ざし、生きる意味など教えようともしない大人たちは、未来を生きる子どもたちから人としての在り方・生き方を問われている。

註

- (1) この授業は『ケータイの一生 ～ケータイを通して知る私と世界のつながり』開発教育協会 2007年に依拠している。他に P・W・シンガー著『子ども兵の戦争』NHK出版 2006年も参照。
- (2) 『ケータイ白書2011』編者インプレスR&Dインターネットメディア総合研究所 インプレスジャパン 2010年 P30
- (3) 学習指導要領の改定の基本的な考えを示した2008年1月の中央教育審議会答申では「現代社会については倫理、社会、文化、政治、法、経済にかかわる現代社会の諸課題を取り上げて、人間としての在り方生き方についての学習や、議論などを通して自分の考えをまとめたり、説明したり、論述したりするなど課題追求的な学習をいっそう重視する」とある。この内容は本校社会科の目指すところに全く合致し、この授業が願うところとも合致する。
- (4) アムネスティ・インターナショナル編著『世界の子どもたちは今2 働かされる子どもたち 児童労働』リブリオ出版2008年
- (5) アムネスティ・インターナショナル編著『世界の子どもたちは今3 売られる子どもたち 子どもの人身売買』リブリオ出版2008年
タンタルなどの鉱物資源については、2012年度までは少年兵の問題と同時に、鉱山で働かされている子供たち、つまり児童労働の問題も合わせて取り上げたことがあるが、児童労働の問題まで広げると、問題が大きくなりすぎる。焦点を少年兵に当てて、児童労働や児童買春の問題は割愛した。限られた時間の中で、どの問題に生徒の意識を集中させていくのか、絞り込みが必要である。
- (6) 前出『ケータイの一生 ～ケータイを通して知る私と世界のつながり』P13
- (7) 中国工業情報省によれば、2014年1月末で中国の電話利用者は14億32万人。携帯電話利用者は11億2000万人。固定電話は2億8000万人。国家統計局によると2012年末の中国本土の人口は13億5000万人。電話利用者が総人口を上回っている。URL <http://bpa-japan.org/blog/>
- (8) 前出『ケータイの一生 ～ケータイを通して知る私と世界のつながり』 P20～21
- (9) 前掲書 P23
- (10) 前掲書 P23
外務省ウェブサイト<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/congomin/data.html#02>も参照
- (11) アムネスティ・インターナショナル編著『世界の子どもたちは今1 銃を持たされる子どもたち 子供兵士』リブリオ出版2008年 P57
- (12) 前掲書 P61
- (13) 『ブラッド・ダイヤモンド』(原題: *Blood Diamond*) 監督/制作: エドワード・ズウィック
2006年制作アメリカ映画 西アフリカ・シエラレオネ共和国の内戦(1991～2002年)において、紛争ダイヤモンド(政府軍と反政府軍との戦いの中で、その戦いの中で必要となる武器調達のため資金を得るために不法に取引されるダイヤモンド)に関わって、少年たちが兵士として拉致・監禁・訓練・実戦使用される場面がリアルに描かれている。
- (14) 人殺しなど残虐な場面を見せる時に配慮が必要である。近年、映像に衝撃を受けてその影響がずっと残る生徒がいる。この映画の冒頭では、ゲリラに捉えられた村人の手(腕)を切断する場面が出てくるが、この場面の衝撃は極めて大きい。2012年、2013年はこの場面の寸前のところで止めて、早送りして次の場面を見せている。
- (15) 少年兵の実態は生徒にとってはかなり衝撃的なものであるようだ。ネガティブな反応も少なくない。2010年にはじめて取り上げた時は、生徒の感想の約半数が、「ぼくら日本人にはどうしようもない。」「何かをしたって何も変わらない。」という感想であった。これは予想外だっ

た。「コンゴでは大変なことが起きている。自分たちに何ができることは無いか」「“少年兵”はひどいことだ」とする感想が多くなると予想していたのだが、そうはならなかった。そこで急遽、次の1時間を使って、「このケータイのタンタルのこととか少年兵のこととかどうしようもないという人が、このクラスには多くいるけど、本当にどうしようもないのだろうか。もう少し考えてみてほしいんだけど…」と話して、少しの時間話し合いをした。自分が考えていることをこちらから指名して、数人に発言してもらって、その後で再度感想を書いてももらった。その感想が以下のものである。

「正直、仕方がないとは思いますが、日本にできることはあまりないと思うし、この授業をしなかったらまったくといっていいほど、分からなくて、世の中の人知らない人がたくさんいると思うから、正直、できることはあまりないと自分は考えます。これからどんどんケータイが進化し、いい機械がたくさんできてくると思うので、今現在、タンタルは必要だと思う。(ST)」「自分の持っている物がどのようにできたか、どのような状況の国からの材料なのかを知る必要はあると思う。しかし、材料を日本や他国に売って、そのお金で武器を得ると知っても、日本だけがケータイを買わなければ解決するという問題でもない。よくCMなどで「あなたが変われば変わります」などと言っているのを見るけど、実際には60億人以上いる地球の一人なので、変わりはないと思う。(KC)」

こうしたネガティブな感想とは逆に、意欲的な感想ももちろんある。

「関心を持つだけでも、持たないよりはずっと良いと思う。そのいろんな“問題”は本当に起こっていることなんだから、“何も変わらないから”なんて言って、関心を持つことさえやめてしまったら、さらに何も変わらなくなってしまうと思う。／でも、ケータイのこととかダイヤのこととか本当にむずかしい問題です。」(HN)「自分も先進国で生きている一人の人間として、ケータイなどを使っているのだから、問題に関心を持つことは必要だと思う。このような問題を世界の人々が理解しないままでは何も変わらないけれど、ダイヤモンドが紛争の道具に変えられていることなどをもっとたくさんの人々が理解すれば、そこから何か少しでも変わることがあるかもしれない。何も変わらないから仕方がないというよりは、どんな小さなことでも関心を持ったほうがいい。タンタルをこのまま使っても武装勢力に使われるのなら、もっとタンタルに変わるものの研究を早く進めた方がいい。」(CM)

2012年度に、この問題について話し合った時は、クラスが「仕方がないってことはないでしょ。」「戦争はダメでしょ。まして、子どもを戦争に使うなんてありえない。」「この国の政治家たちって、どうかしてんじゃないの」と、ある意味「内戦→全否定」、「武器購入→全否定」の雰囲気だった。さらに、「自分たちのケータイやスマホも、ちょっと考えものだ。」「日本も何とかしなきゃ、でしょ。」というような意見も出されていた。が、その話し合いの終盤、それまで黙って聞いていた生徒の一人が手を上げて発言した。

生徒「先生、武器を持って戦っている人たちって、何かそれなりに理由があって、なんか戦わなきゃいけない理由があって、武器を持っているわけですよ。その理由の部分が決済しない限り、こっち（日本）で、戦争やめろ、武器買うなっていっても、無理じゃないですか。戦うには戦うだけの理由があるんだと思う。」

この発言で、クラスの空気が変わった。生徒たちが「なるほどそんな意見もあるのか、カンタンじゃないんだな。」「単に『戦争反対』って言っても、そんなに簡単じゃないんだ?!」と考えて、ぐっとクラス全体が深い思考に包まれた感があった。

- (16) URL <http://www.terra-r.jp/>

本校では毎年12月、1年生対象に「社会科特別授業」を行っている。午前中、4時間連続で行う「現代社会」の授業である。“現場”を知る講師から直接話を聞くことと、実行委員会を組織して生徒と一緒に授業を作り上げていくことを大事にしている。ディベートや創作演劇なども取り上げて、できるだけ生徒たちが「感じる」「考える」ことができるような内容を模

索している。近年のテーマは「戦争と平和」が主である。「テラ・ルネッサンス」代表鬼丸昌也氏は、2006年度の講師としてお招きしてお話しいただいた。

- (17) 林竹二著作集第Ⅷ巻『運命としての学校』筑摩書房1983年 P85
- (18) 前掲書 P115
- (19) 『スマホ白書2102』編者インプレスR&Dインターネットメディア総合研究所 インプレスジャパン P51
- (20) 週刊東洋経済特集 “ガラケーユーザーのスマホ選び” 2013.11.23 東洋経済新報社 P38～